

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話(三)

編 山形民話の会・武田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話（二）

編

山形民話の会
武田正

高橋良雄さんの 及位の昔話 (三)

26	25	24	23	22	21	20
猿むがし	猿むがし	猿むがし	猿むがし	化げ物 ^{おの} むがし	茸の化げ ^{おの} の	初夢
四七	四〇	三三	二五	二二	一七	五

31 30 29 28 27

屁 屁 屁 屁 雀
っ っ っ っ む
ぺ ぺ ぺ ぺ が
り ん ん ん し
爺 爺 爺 爺

七 七 七 七 六
九 四 二 〇 二

高橋良雄さんの原稿によるものです。

20 初 夢

むがしあつたけど。

ある時^{づき}なあ、殿さま正月五日家来達^{たち}とお城^{あつ}さ集^{あつ}んで、皆^{みな}なんた初夢^{はつむ}みだが語^{かた}て聞^きがへろ、ていうけど。ええ夢^むづあ語^{かた}るおんでねあ、て昔^{むかし}から言^いわつておんだとも、殿^とさまがら聞^きがつておんだはげあえ、一人^{ひとり}一人語^{かた}て聞^きがへだど。

「おれあ、何処^{どこ}だが分^わらねあども、戦^{いくさ}さ行^いて重^{おも}であえ鎧^{よろい}着^きて、一日^{いちにち}中^{なか}あつたこつつだて走^{はし}して歩^{ある}て、今朝^{けさ}んなたら疲^{つか}っただけは」

て言う^いなもいだけど。或^{しと}人^{ひと}あ、

「おれあ、お城^{しろ}のお庭^{にわ}で、殿^とさまどから、おてまえいだであえだ夢^むだけ。とでもええ天^{てん}気で、鶯^{ねあ}あ鳴^なっただけし、ほのお茶^{ちや}のんめごど、まだあんげあえんめあえお茶^{ちや}なの飲^のだごどあねあよだけ」

なて言う^いなもいだけど。

或^{しと}る若^わあえ男^{おとこ}あ殿^と様に、「お前^{まへ}はどんな夢^むを見^みだ」て言^いわつたども、ほの若^わあえ

男人あ、「この夢あ教へられあへん」て言たきりで、なんぼしたて教へねあけど。
ほんで殿さま、怒で、

「家来の分際で、主人に教へらんねあなてねあべ。よしつ、それなら」

ていうごどんなて、ほの男人あ、島流しんさつでしまたけどは。

ほの男人あ勇氣もあるし、ながなが利口た人であえつたど。ほうしてほの男人あ、
ほの島の高あえ木さ登て周り見たば、向うの方さお城みであえんたな見つけど。
ほんで「んであよしつ、鬼こあだいだていうあのお城さ行てみんべ」ていうなで、
ほごさ行てみだど。

ほうしたば、やっぱり鬼こあだいで、出はて来て、ほの男人捕めで、鬼の大将
んどさ連で行たど。ほうしたば鬼の大将あ、

「お前、なんずして処所きた」

て聞くけど。ほんで、

「俺あ初夢教へねあどて、殿さま怒がつで島流しんさつだあだ」
て言たど。ほしたば、

「なして教へねあがつた」

というはげあえ、ほの男人あ、

「ええ夢じゅあ教へらんねあおんだ、て昔からいうはげあえ、おれあええ夢みだはげあえ教へねあがつたあだ」

て言^ゆたば、鬼の大将あ、

「ほんげあええ夢だば、おれあ聞^きぎであえはげあえ教へろ」

つけど。ほんでもほの男人あ、

「この夢あなんずしても教へらんねあ」て言^ゆたば、

「なんだど、このおれさまさも教へらんねあていうなが。教へらんねあごつたら、食^くてしま^しうぞ」

て、威^{おど}すけど。ほうすつどほの男人あ、

「あげあえたええ夢あ、なんぼ殺^{ころ}すて言^ゆわつだて教へらんねあ。殺^{ころ}すなだば殺^{ころ}さつでもえ。食^くうなだば食^くつでもえ。おれも男^{おとこ}だ。さあ、好き^{すき}だよんすろ」

て言^ゆたば、鬼の大将あ、

「う！ お前めあえみでごろあある。勇氣ある男だ。よしつ、助けでやる。暫しばらく此所ここで暮暮へ。ほうして教へでもええ時つぎあきたら、おれあどき教へろ」

て言ゆて、家来達ださ、

「ええが、お前達、今日からこの男をお客きやくだと思てあづがえ」

て言ゆてくつで、大切でえじんさへだけど。

ほうして暫しばらく暮していだば、或時、鬼の大將あ、ほの男人呼ばて、「どうだ。まだ語らんねあが」て聞きぐけど。ほんで、

「まだ語らんねあな」て言ゆたば、

「んであ、おれあ鬼が島のとつておぎの宝物おのめ見へる。これあ人間の世界にあなんぼさがしたてねあおんだ。此所ここでだてまだ家来達だどさも見へだごどのねあ宝物だ。ほんで、ほの宝物見で、これだば見めへでもらた価あてあえある。夢語る価あると思たら語れ」

て、ほの宝物出してきたけど。一づしどあ、水に沈まね下駄しただけど。二つつ目あ、鳥の白羽で、これで体なでつど、日本一の智慧のある、色白のええ男人なる珍ら

す羽だけど。三つつ目あ、だおの黒羽で、これで体なでつど、めくせあえ黒ん坊になんなだど。四つつ目あ、青葉の笛じよんで、この笛吹ぐど、聞だごどもねあええ音あ出で、天飛ぶ鳥も羽をよどめ、地を這う虫は足をよどめる程の音色出す笛だど。

ほういう宝物四つつ見へだけど。ほんでほの男人あ、

「なるほど、これは世にも珍しいものばりで、人間の世界には無あえ物ばりのよだ。んでも、どれもただ見だばりであ分らねあ。一度試してみで、これだば本当だていう事分れば、おれの夢語て聞がへる。海も近けあえし、海ばださ行て試してみんべ」

て言たば、鬼の大將あ、

「んだが。んであ見でろ、試してみつさげあえ」

ていうけど。ほうすつどほの男人あ、

「お前試したて駄目だ。おれあどさ試さへでみろ」つけど。ほんで、

「んだが、んであ貸すはげあえ、試してみろ」ていうけど。

ほうして、男人あ、ほれ借りつど、まず、青葉の笛腰ささして、沈まねあ下駄履えで、鳥の白羽じだおの黒羽持て、海さ入て行てみだど。ほうしたば、やつぱり沈まねあで海の上自由に歩ぐえなだけど。ほれ分つど、ほの男人あ、「これあええおんだ」ていうど、どんどと向うさ走して行てしまたけどは。鬼の大将あ、なんぼ戻れて叫でもきがねあで海の上何処までも、日本の国の方さ逃げで行てしまたけどは。

ほうして、陸さ着でみたば、其処あ酒田だけど。まず良がったど思て、だおの黒羽で体をなでみだば、鬼の大将あいう通り黒ん坊んなたけど。ほうして、何処が大つき家で使てもらわんねあべかど思て、あつっこつ歩たど。ほうしたば、ほれこそ大つき、まだ見だごどねあ立派だ屋敷あ、あつたけど。ほんでこごだば使てくれるんねあべがど思て、ほごの家の門くぐて入てみだど。ほうしたば、其処あ本間さまであえつたど。

ほうして、「なんでもええはげあえ、なんずが使てもらわんねあべが」て言たば、ほん時かまど焚ぎしつた黒ん坊に逃げらつて、さがしつたおんだはげあえ、自分家

の黒ん坊あ戻ってきたあだど思たども、ええぐ見つど違う黒ん坊だけど。んでも、かまど焚ぎする者おのあいねあぐなたおんださげあえ、丁度えどて、使てもらうごどんなたけど。ほうして、ほの男人おとしとあ、本間さまさ住み込で、かまど焚ぎして使わつでだけど。

ほの頃、本間さまにあ、三人の娘あいで、姉あ松こ。次あ竹こ。末の娘あ梅んめこていうなだけど。

ある時、梅づきこあ、夜んまおそぐ、便所さ起きだば、黒ん坊の室さ、まだ灯りあつだけど。ほんで梅こあ、「黒ん坊あ、今頃まで起きで、何しつたおんだべ」ど思て、そつと覗のぞこでみだど。ほうしたら立派わけだ若え男人あ机さ据て、本出して勉強しつたあだずおん。

梅こあ、「なえだて、此処あ黒ん坊あ室だであなあ。黒ん坊あいねあで、若え人しとあ勉強しつたおんだ。不思議おがごど」ど思たども、先ず、明日、まだ見んべど思て寝だど。ほれあ、ほの男人あ、烏の白羽で体なで、立派なたあだなて知らねあんだおん。

梅こあ誰つあも語らねあで、次の晩まだそつと行て見だば、やつぱりええ男人あ勉強しつたけど。梅こあ不思議で不思議でしかだねあがったども、誰あどさも喋らねあで、ほのうづん分んべど思て黙つていだけど。

ほうしているうづん、酒田の山王さんのお祭りんなて、娘達も山王さんさ、お参り行くごどんなたけど。ほんで本間の旦那さまあ、黒ん坊あどさ、

「厩がら馬出して、三つのかまどさ湯えつぺあわがして、三匹の馬えぐ洗らて、娘達のへでやれ」

つけど。ほんで黒ん坊あ、朝ま早くから、三つのかまどさ火焚あで、えつぺあ湯沸して、馬かわりがわり出して、三匹綺麗ん洗らて待ちつだど。ほうしたば、娘達あ、お祭りだおんだはげあえ、ほれこそ綺麗だ着物きて出はて来たけど。ほんで黒ん坊あ、先づ、松こあどのへだど。ほして、のへつ時、松こあけつつ、ぎりひねたど。ほしたば松こあ、

「痛あえつ。ないだべこの黒ん坊あ、人のけつつひねりあがて」
て、ほれこそ怒で、ふんふんて乗たど。ほんでも黒ん坊あ、知らねあふりしつ

たど。ほうして、今度^{こんだ}あ竹こあどこのへだど。ほうして、ほれものへつ時、まだ竹こあけつつも、ぎりりひねったけど。ほうしたば、竹こも怒で、

「なにすんなだこの黒ん坊あ、人のけつつひねりあがて」
で、ふん。ふん怒で、黒ん坊あどごにらめつけど。

ほうして、一番^{いちばん}あどがら梅こあどご乗へで、梅こあけつつも、ぎりりひねたど。

ほしたば、梅こあ、ただにこにて笑てるばんだけど。ほうして娘達あ出はて行ぐど、旦那あ、黒ん坊どさ、

「黒ん坊、黒ん坊。お前^{めあえ}も着替^{きげあえ}で、お祭りさ行てこえ」

で、本間の定紋つつだ羽織ど袴貸してくっだけど。ほんで黒ん坊あ、自分^{おわ}室^{こす}さ行て、鳥の白羽で体なで、立派^えんなて、ほの羽織着て、袴へあえて、青葉の笛腰さ差して、山王さんさ行^えたけど。羽織さ本間さまの定紋あつつだべし、立派だ人品だおんだはげあえ、ほの男人あ行たば、町の人^{しだう}達あ、本間さまの若旦那^{あんさん}どごなの見だごどあねあんだし、誰も黒ん坊だなて知らねあおんだはげあえ、みな本間さまの若旦那だご思^もて、よげで通してくっで、お参りさへだけど。

ほうして、お参りすつどほの男人あ、前さ出はて来て、腰がら青葉の笛とて吹えだけど。ほうしたば、ほの笛の音色あ、ええおんでええおんで、本当ん空飛ぶ鳥は羽をよどめ、地を這う虫さえ足をよどめるていうおんだべ、て、町の人達あ聞き惚れでしまたけど。松こも竹こも、梅こも聞き惚れただけどは。ほうして、しばらく吹えで、家さ帰^{けあ}えて来て、帳場さ頭さげで、自分室さ戻て、着物脱えで、だおの黒羽で体なでで、元の黒ん坊んなで、旦那どさ着物返^{けあえ}したけど。

ほのうづん、娘達も帰えて来たけど。黒ん坊あ出はて行て、娘達どご馬がら下ろしたど。ほうして下す時、まだ、娘達のけつつひねったけど。ほうしたば、松こも、竹こもしこであま怒^{ごしえ}だけど。んでも、梅こぼりあ、さつぱり怒がねあで、まだ、にこにこてるばりだけど。

ほうして、娘達あ家さ帰えてくつど、旦那あ娘達さ、

「今日のお祭りあなんとけ。なにが面白^{おもへ}ごどあ、あつたけが」

て聞だど。ほしたば娘あだ三人とも、

「すばらす笛聞で来た。あれあ一番面白^{おもへ}がつた」

て教^{おへ}だど。ほしたば旦那あ、

「ほげあえたええ笛吹えだな、どこの人^{ひと}だけ」

て聞^きぐど。ほんでも、松こも、竹こも、「おら知らねあええ男^{おとこ}だけ」て言^いたば、
梅こあ、

「あれなの、おれあ家^えの黒ん坊だ」

て言^いたど。ほしたば旦那あ、「んであ、黒ん坊どご呼^よばてみる」て、黒ん坊あど
ご呼^よばたど。ほうして、「お前、今日山王さんさお参^{まゐ}りしたが」て聞^きだば、黒ん坊あ、
「お参^{まゐ}りして来^きあした」つけど。ほんで旦那あ、「ほんであ、山王さんで笛吹えだ
が」て聞^きだば、「吹^ふぎあした」ていうけど。ほんで、

「んであ、祭りさ行^いぐ時^{とき}貸^かした羽織^{えり}ど袴^{はかま}つけで、ここぞほの笛吹えで聞^きがへろ」
て言^いたば、「はえ」て、着^き替^かえできて、旦那の前^{まへ}でほの笛吹えだど。鳥の羽で撫^な
でできたおんだはげあえ、人品もええべし、男振^{おとこ}りもえぐなて吹えだべ。んだお
んださげあえ、なおさら笛の音もすばらしくて、旦那も聞^きぎ惚^{おろ}れでしまたけどは。

ほんで旦那、うんと賞^{しょう}めだけど。んだおんだはげあえ、松こも竹こもほの男^{おとこ}人

さ惚れでしまたけどは。ほうして二人あほの男人むこ聾めんもらいであて旦那ゆどさ言たば、梅こも、おれもあの人の嫁んなつであて言い出したけど。ほんで旦那しやうも仕様ねあ、だまつて庭の坪見で、なんずんしたらえがべと、考かんげあえつだけど。

ほうして、

「お前達めあえた三人で、一人の聾しとりおし、なてゆたて出来でるおんでねあ。ほんでなあ、ええが、今庭えまさ驚おのあきつたべ。あの驚おの枝ゆさ止とつたまま、おれあどさ持もて来え。ほうして持もて来た者ものさ貰もらてやる」て言たど。

ほんで、まず、松こがらするごどんしたど。松こあ、そつと驚おどんどさ行たど。んでも、驚おどあ逃ねげねあけど。ほんで驚おどの止とまてだ枝さ、そつと手かげだど。ほんでも逃ねげねあけど。ほれで、ぱちんと枝折たど。ほしたら、驚おどあ、ぱつと次の枝さ移たけど。ほんで松こあ、まだ、そつとほの枝さ手やたども逃ねげねあで、枝折つど逃ねげんなで、とても駄目だけど。

ほんで、今度あ竹こあ行たど。んでも、やつぱり松こど同おんなじだけど。

ほんで、今度あ梅こあ行たど。梅こあ小走りん行たども逃ねげねあ。手出して

逃げねあで、枝ばちんと折たば、ぱつと羽ひろげだばんで逃げねあけど。ほんで梅こあ、ほのまま、そつとお父さんどさ持て行たど。ほんで、旦那あ約束どおり梅こどさ、ほの男人聶んもらてくつだけど。

ほの男人あ、最後まで初夢誰あどさも語らねあがつたはげあえ、本間さまの聶んなア、幸福しつしゃわへん暮へるよんなたあだべ。

梅に驚ていうことばあ、梅こあ驚止まらへだはげあえいうよんなたあだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。(集成一五六「夢見小僧」、二一一「灰坊」)

〈話者 高橋初吉〉

21 茸の化げおの

むがしあつたけど。

むがしなあ、左道みづみちさ行く曲た坂道の林ん中さ、毎晩化け物もののあ出はてきて、一晚、

「おおしえまで、おおしえまで」

て叫さかでんなだけど。ほんで、村の人達したちあ恐ねあくて、夜んなつど外さ出はらんねあぐなたけどは。ほうしてつどき、何処どこからが、一人の和尚さん、托鉢しとりして廻まわて来たけど。ほうして村の人達あどから左道の坂さ、毎晩化け物おのあ出はて、村の人達あ困えてだ、ていう話聞だあだけど。ほんでほの和尚さん、「んであ、おれあ行えてみで来る」ていうなで、暗くくなてがら、左道の坂え行えてみたど。ほうしたば、やっぱり林の中で、

「おおしえまで、おおしえまで」て叫さかぶ声あすつずおん。ほんで、ほの声のする方かた行えてみだども、暗くあえおんださげあえ、なんと化け物だか分わらねあけど。ほんで和尚さんあ、

「こらつ、お前めあえあないの化け物だ」

て、大つき声で聞いたば、

「おれあ、ごこの主の化け物だ。お前んつあ、何ないの化け物だ」
つけど。ほんで和尚さんあ、

「おれあ、大坊主の化げ物だ。お前何が恐ねあおのあ、あるおんだが」

て言たば、ほの化げ物あ、

「ああ、おれだて恐ねあおのあある。おれの一番恐ねあな栗だ。饅頭^{まんじゅう}だば大好きだども、栗だばみんなも嫌^やだ」

つけど。ほうして、

「ほんであ、大坊主の化げ物、お前^んあ何が恐ねあおのあ、あんなだが」

て聞ぐけど。和尚さんは、

「おれあ一番恐ねあな饅頭^{まんじゅう}だ。饅頭^{まんじゅう}だば、恐ねあくて、見だばんで身ぶるいする」

て言たば、

「ほお、不思議^{おがし}おんた。あんげあえ美味^{んめあ}え饅頭^{まんじゅう}好ぎんねあなて、んであ何好ぎだ

おんだや」

て聞ぐけど。ほんで和尚さんあ、

「おれの好ぎだな栗だ。生栗あ大好物だ」

て言たば、ほの化げ物あ、

「んであ、どうだや、明日の晩、おれあ生栗持てくつさげあえ、お前、饅頭持てきて交換すねが」

ていうけど。ほんで和尚さんあ、これあ面白へど思て、

「ほれあええな。んであ、明日の晩、饅頭持てくつさげあえな」
て、ほの晩は別ただけど。

ほうして次の日、和尚さんは村の人達あどがら、えっぺあ栗もらて、ほれ懐さ入で、暗ぐなてがら左道の坂さ行て、「おおしえ何処だ。おおしえ何処だ」て叫たば、「おおしえここだ。おおしえここだ」ていう声あすつずおん。ほんで和尚さん、ほの声のする方さ行たど。ほうして、側さ行たば、化げ物あ、

「おれの好きだ、饅頭持てきたがや」
つけど。ほんで和尚さんあ、

「ああ、持てきた持てきた。ほらっ、これでもま食うんだ」

て、懐から栗つがで、ほの化げ物あどさ、ばえんばえん、どぶからみづげでやたど。ほうしたばほの化げ物あ、

「恐ねあちや恐ねあちや、ああ恐ねあは。この野郎あ、おれあどさ栗ぶからで、ああ痛あえ、ああ痛あえ」

て叫びながら、和尚さんどさ、

「ほらっ、お前あ恐ねあ饅頭だっ。これでもまぐらうんだ」

て、和尚さんどさ、饅頭ぶからでよごしたけど。和尚さん喜よろこで、ほの饅頭、えっぺあ懐ふさ入で、

「ああ、饅頭だ。恐ねあごど恐ねあごど。ああ痛あえは、ああ痛あえは」

て言いいながら、化げ物あぶからでよごした饅頭、みな拾ひろろて、化げ物あどさ、

生栗ありったげの力で、ばえんばえんどぶからでやたら、ほの内、化げ物の声すねあぐなたけどは。ほんで和尚さんあ、懐さえっぺあ饅頭入いつで村き帰かええたけど。

ほうして、ほの饅頭、村のわらしたづき、みな呉くつたけど。ほれがら次の日、明あかり

ぐなつど、和尚さんあ、左道の坂さかさ行てみたど。ほうしたば、林ん中に栗ぶつ

けらつで、かささえっぺあ穴開えあえつた大つき茸あ、ぐにやつどぶつたおつでだけど。

ほの化げ物あ茸の化げ物だけど。ほれがらずおあ、ほの坂さ化げ物あ出はらねあ

ぐなたけどは。とんぴんからんこあ　ねあつけどは。

話者　高橋良雄

22　化げ物^{おの}むがし

むがしあつたけど。

ずっとむがし、旧村のかず沢さ化げ物あいで、夜んまなたていうど、「ぶーん、ぶーん」て、哀れだ声出して叫でんないだけど。ほんで旧村の人達あ、晩方なつどは恐れあくて、向うのかず沢の方さ行がねあぐなてしまたけどは。ほんでほれ聞^きだ鏡沢^{かがみざ}の三太ていう、馬鹿力のある男あ、

「なあんだ。化げ物なてほんたおのあ、おれあ行^えて征伐してくえる」

て来たけど。ほうして、旧村のお橋渡^{わた}て、地藏^{ざぞ}さまん所^どから、かず沢^{へあ}さ入て行^{ずん}たど。夜んま提灯^{ずん}つけでだけど。ほうすつどほれ、かず沢で化げ物あ、

「ぶーん、ぶーん」

て叫ぶおどすつずおん。ほんではの声のする方さ、ずっと行てみだば、ほら穴あつけど。ほうして、ほの化げ物あ、ほの洞穴んながで、すこであえま大つき眼光らへで、「ぶーん、ぶーん」て叫でんなだけど、ほうして、三太顔さなま臭あえ息、ふーつふーつどかげでよごすなだけど。ほれさ暗あえおんだおん、化げ物の姿なの見ねあべ。んだはげあえ、顔さは臭せあえ息ふつかげられるし、大つき光る眼でにらめられるおんだはげあえ、これだば、なんだ化げ物だか分らねあおんだと思たら、恐ねあぐなてしまて、青ぐなて逃げできたけどは。

ほうすつど、ほれ聞で村の人あ、みんな恐ねあがていだけどは。ほうすつど、旧村の十五んなる、小つちやえ野郎こあ、

「んであ、おれあ行てみる」

つけど。んだおんだはげあえ、つあつあ（父）もがが（母）も、

「ほんた化げ物さなの、ないだどて行ぐどご。たあだ食つてしまうばんだんだはげあえ」

て、何回言て聞がへだたて、ほの野郎こあ、きがねあけど。

ほうして、ほの野郎こあ、蓬干したな一背負しよて、小つちやえかしぎ（雪べら）一づ持たばりで、昼ま行たけど。ほうして、かず沢のぼて、洞穴んどさ行たども、昼まなおんだはげあえ、化げ物の声あしねあけど。

野郎こあ、穴んどごで、背負てだ蓬下ろして、ほれさ火つけで、どんどんえぶして、ほれ穴さぶこでやたど。ほうして、一寸おもたば、穴ん中がら、「ぶーん」て化げ物あ出はて来たけど。ほうして、野郎こあ前さ、どさつと下りだけど。野郎こあ、えつくん見たら、大つき蚊だけど。ほの蚊あ、野郎こあ前さ膝つで、

「どうが、おれあ眼さ入った栃取つて下あえ」

て願うなだけど。蚊あ、栃の実、眼さ入らつてしまて、ほれ取れねあくて、ぼろぼろど涙出して泣っただあだけど。ほうして、ほの栃の実取てころどて、ぶーん、ぶーんてあわれだ声出すなであつたけど。

ほんで野郎こあ、かしぎで蚊の大つき眼がら、ほの栃の実取てくつだど。ほうすつど、蚊喜では、大つき羽ひろげで、「ぶーん」ていうど、どさが飛で行てし

またけどは。とんぴん からんこあ ねあつけどは。(集成六四〇「短い話」)

話者 高橋久米次郎

23 猿 む が し

むがしあつたけど

むがしなあ、あるどさ娘あねこ三人もた爺さまいだけど。爺さまあ田えつぺあ持つ
たおんださげあえ、毎朝めあえ田まわりすんなだけど。

ほうしてなあ、ほの朝まも田まわてみだど。ほしたば、何日えつかも雨あ降らねおん
だおん、田乾かわあえでしまては、稲あ枯れそだけどは。爺さま困てしまて、何処どこか
らが水引がねあば、稲あ枯れるばんだはで、あちこち見だども水なの引がれそだ
どこあのねあけど。

ほんで爺さま困ては、

「誰がおれあ家の田さ、水かげてくえる人あいねあんだが。水かげてくえつごつたら、三人いだ娘こ、どれが嫁んくえんどもなあ」

て、一人ごと言てだど。

ほうしたば、ほごさ側の藪がらがさがさど音さへで、猿こあ出はて来たけど。

ほうして、「爺さま、爺さま。今言たごどあ本^{えま}当だがや」つけど。ほんで爺さまあ、

まさか、猿こなの、この田さ水なのかげれるわけあねあべど思たはげあえ、

「んだんだ、沢の水でも、塩根^{しよね}川の川の水でも、この田さえつぺあ水せあえもかげでくえれば、誰あどさでも娘^{あね}こ呉へる」

て言たど。ほうすつど猿こあ、

「嘘^{ずほ}んねあべな爺さま」て念おすけど。ほんで爺さまあ、

「嘘なのこがねあ。本^{えま}当のごどだ」

て、爺さま言たば、猿こあほこほこて喜で、沢の方さ、どんどど走してえたけどは。

次の日、爺さまあ、まだ田まわりんえたど、ほしたば、田さえつぺあ水あかがつ

たけど。爺さまどでしてしまたけどは、ほごさ猿こあ、まだがさがさど出はてきて、

「爺さま、爺さま、田さ水かげでくつだはげあえ、約束の嫁こ、明日もらいん行くさげあえな」

というけど。ほんで爺さまあ、田さ水かげでもらたなえども、まさか猿こにかげでもらうどなの思わねあがつたし、猿こあどさなの、娘こ呉えるよんなると思わねあがつたおんだはげあえ、爺さま困てしまたけどは。ほんでは、爺さまあ、家さ行て、布団かぶて寝てしまたけどは。

ほうして、次の朝まんなても爺さまあ、起きてくつじやねあけどは。あんまり爺さまあ起きてこねあおんだはげあえ、姉だな起ごしん来たけど。ほうして、

「爺さま、爺さま、まず起ぎで飯食てころは」

て、爺さまどご起ごしたども、爺さま起ぎねあけど。ほんで、

「爺さま、爺さま、どごがえぐねあなが」

て聞いたば、爺さまあ、

「実^ずあ、田さ、さっぱり水あかがらねあで、稲^あ枯れそだけはげあえ、田さ水かげで呉えつごつたら、娘^{あね}こ嫁んくえる、て言^ゆたら、猿こあえつぺあかげでくつだおんだはげあえ、お前^{めあえ}だ、猿この妻^{わけあえ}なのならねあべし、ほんで困て起ぎらんねあなだ。お前^え行て呉えらんねが」

て言^ゆたど。ほしたら姉娘^{ごしやえあ}あ 怒^こで、

「なえだどや、爺。誰^あ猿の妻^えなのなるんだて」

て、ただふん。怒^えで、行てしまたけどは。

爺さまなあ、困てしまて寝つだずおんは。ほしたば、爺さま起ぎでこねあおんだはげあえ、二番娘^こあ起^こごしん来たけど。

「爺さま、爺さま。早く起ぎで、飯食^{ままけ}は」

て言^ゆたど。ほんで爺さまあ、二番娘^こだはいうごどきぐんねあべがど思^もて、

「田まわり行^えたば、何日^{えつか}も水あかがらねあぐなてしまたおんだはげあえ、稲^あ枯れそんなてしまたなよ。んだはげあえ、おれ^えあ、家の田^えさ水かげでくえれば、誰^ああどさでも娘^ここ嫁んくえる、て言^ゆたら、猿こあえつぺあかげでくつだおんだおん。

んだはげあえ、困て寝てだなだ。んだはげあえ、お前猿めあえこの妻めあえなてくえらんねあが」

て聞だど。ほしたば、二番娘こも怒で、

「爺ぢつ、あんまり馬鹿くせあえど言ゆわねあんだな。なえだどて、人ひとあ猿さるの妻めあえなるえどど。ほんたどどあ世の中よのちうにねあべな」

て、怒で怒こで行えてしまたけどは。

ほんで爺ぢさまも、娘むすめこあだ怒こぐな無理もねあて困て、まだ布団ふだんかふて寝っただけどは。ほごさ、今度だあ末娘こあ来て、

「爺ぢさま、爺ぢさま。なして起きで飯食かねあや。どごがえぐねあなが」
ていうけど。んでも爺ぢさま返事しねあけど。ほしたら末娘こあ、

「どごが痛いたであなが。痛いたでこつたらさすてけつが」
て、やさしごどいうけど。ほんで爺ぢさまあ、

「どごも痛いたであどごなのねあなだ。ただ困でつたどど出来でだはげあえだ」
て言ゆたど。ほうしたば、末娘こあ、

「なんだや、ほの困るごどて、おれで出来^げんなだばなんでもすすさげあえ、言^ゆて
みろちや」

ていうおんだはげあえ爺さまあ、

「実あなあ、山田さ水あかがらねあくて、稲あ枯れそえなたおんだはげあえ、困
て、この田さ水かげでくえれば、誰あどさでも、娘^{あね}こくえる、言^ゆたら、猿こあ
えっぺあかげでくつたなよ。人だはげあえ困てだあだ」

て言たど、ほしたば末娘こあ、

「爺さま、爺さま、ほんだごど困んな。おれあ猿^{わげあえ}の妻んなつさげあえ、まず起
ぎで飯^けばりも食は」

ていうけど。ほんで爺さまあ安心^{どっか}どして、飯食たけど。ほうしているうづん、
猿こあ来て、

「爺さま、爺さま。約束の嫁こ貰いん来たぞ」

て来たずおん。ほんで爺さまあ、

「ほつがほつが。んであ、まづ、入^へれ入^れ」

て、猿こあどこ入らへで、祝事の餅つでくつで、盃事して、

「この餅持て行て、二人して食よ」

て言たど。ほしたら猿こあ、

「んであ、重箱さでも入つでもらて行んか」

て、嫁こあどさ言たば、嫁こあ、

「重箱さなの入つど、重箱臭ぐなっさげあえ食んねあぐなる」

ていうけど。ほんで猿こあ、

「んであ、井さでも入でもらうが」

て言たば、嫁こあ、

「井さ入つど、井臭せあえくて食んね」

て言たべ。ほしたら猿こあ、

「んであ、臼まま背負て行ぐべは」

て、臼まま背負て、嫁こ連で山さ行たど。

ほうして、だんだん山さ入て行たば、下の方あ川で、崖んなてる上さ春さぎだ

おんださげあえ、美す桜咲っただけ。あんまり美す桜だおんださげあえ、嫁こあ、

猿こあどさ、

「聾々、あの桜あんまり美すはげあえ、一枝取てころちや」

て言たば、猿この聾あ、

「でやでや（そうかそうか）」ていうど、背負てだ臼おろすどごだけど。ほんで嫁こあ、

「あにあに、臼土の上さおろすど、餅あ土臭せあえて食んねあぐなる」

て言たば、猿こあ、「んだが、んだが」て、背負つたまま、桜ぬ木さ登て行たど。

ほうして、上さ行て、「これがあ」て叫ぶけど。ほんで嫁こあ、「もと上んなよ」

ていうおんだはげあえ、猿こあ、まだ難儀して上さ登て、「これがあ」て叫ぶずあ

ん。ほしたば嫁こあ、「んねあ、もと梢んなよ」て言たど。ほんで猿こあ、まだ

重であえ臼背負て、ずつと梢さ登て、ゆらゆらさへながら、梢の細こえどごまで

登て、「これがあ」て、まだ叫ぶずおん。ほんで嫁こあ、

「んだんだ。ほの細こえなよ」

ていうど。猿こあ、ありったげ手伸ばして、ほれ取るかんじよしたべ。ほうすつど細こえ枝さ足かげつだべ。んだおんださげあえ、枝みりみりつていうど折つでしまて、猿こあ、下の川さどんぶり落ちで流つど行つてしまたけどは。どんぴんからんこあ、ねあつけどは。(集成一〇三「猿聾入」)

話者 高橋良雄

24 猿むがし

むがしあつたけど。

あるどさなあ、娘三人もた爺さまあいだけど。ほうしてなあ、ほの年あ雨あ降らねあ年で、んだおんだはげあえ、雨降らねあど、田こぎりも、代かぎもさんねあくなたけどは。

ほうして、爺さまあ沢田^{さわだ}なんずだべど思^もて、沢の方さ行^えてみだど。ほしたば、

沢田さもさっぱり水あかがらねあぐなただけどは。

ほんで爺さま困て、

「こんげあえ何日えつかも雨の降らねあ年あねあおんだ。まづ、困たおんだ。これだば沢田せあえも、田こぎりも代しろかぎも出来でねあ。誰が雨降らへでくえる人あいねあんだが。雨降らへでくえれば、娘三人のうづどれでも嫁んくえんども」

て、爺さまあ、一人ゆごと言てだけど。

ほうしたば、ほごさなあ、猿あ出はて来て、

「爺さま、爺さま。心配すんな。雨なの、おれあ降らへでくえつさげあえ」

つけど。ほんで爺さまあ、

「ほう、猿、お前んつあ、雨なの降らへれんなが」

て言ゆたば、猿あ、

「雨ぐれあえ、おれだて降らへれるや。雨降らへだら嫁こくえつがや」

つけど。ほんで爺さまあ、猿なの、なんずして雨なの降らへれるばや、ど思もたはげあえ、

「ん。雨降らへでくえつごつたら、娘嫁んくえんべ」

て言たど。ほしたば猿あ、

「んであ、明日必ず雨降らへでくえつさげあえな」

て、山の方さ行たけどは。ほんで爺さまあ、猿あ、あんたごと言たたて、なん
ずして雨なの降らへれるおんでねあ、ど思ていたど。

ほうして、次の朝まん、なんだか雨あ降てだみであえだと思て目さましたば、本
当雨あ降ってだあだけど。ほんで爺さまあ、やつぱり猿あ雨降らへだな、これあ
困たごどんなてしまたて、困てしまていだけど。ほうして、これあ困たごどんな
たど思たば、起ぎらんねあぐなては、布団かふて寝っただけどは。

朝飯時分なても、爺さまあ起ぎてくつじやねあおんだはげあえ、姉娘あ、爺さ
まどご起ごしん来たけど。

「爺さま、爺さま。今朝まだなえだおんだや。早く起ぎで飯食てくつちやは」
て、言たべ。ほしたば爺さまあ、

「おれあいうごきぐがや。きぐごつたら起ぎで飯食う」

て言たべ。ほしたば姉娘あごしやえあ怒で、

「馬鹿くせあえごどばり言て、猿の嫁なの誰あなるんだて、このくつき爺んじあ」
ては、ふんふんて怒で、爺さま枕けどばして行てしまたけどは。爺さまも、仕方ねあど思て、まだ寝つだけどは。

ほのうづん、今度二番目の娘あ来たけど。ほうして、

「爺さま、爺さま。早く起ぎで、飯食てころは」

ていうけど。爺さまあ、まだ二番目の娘あどさも、

「お前めあえ、おれのいうごどきぐがや、きぐごつたら起ぎで飯食う」
て言たど。ほしたば、

「今日あまだなえだや、いうごどきがねあば起ぎねあなて、なんたいうごときげばえなや」

つけど。ほんでまだ爺さまあ、

「日照りで雨降らねあくて困て、雨降らへでくえれば、誰あどさでも娘嫁んくえ
るていたべ。ほしたればほれ、今朝猿あ雨降らへでくつたなよ。んだはげあえ困

て寝ったあだ。お前猿の妻わけあえなてくえらんねあが」

て言ゆたら、二番目も怒では、

「このくそたれ爺んじあ、猿の嫁なて糞くらへだ、馬鹿爺だ」

どて、ただぶんぶん怒で、爺さまださありつたげ悪態つで行てしまたけどは。

爺さまあ、仕方ねあくて、まだ布団かぶて寝ったどは。ほしたば、ほごさ今度たは末娘あ来て、

「爺さま、爺さま。なえだて何時までも寝てるおんだちやな。まづ、起きで飯食てころは」

ていうけど。爺さまあ、

「んであ、おれあいうごどきぐがや。んねあば起きらんねあ」

て言ゆたど。ほうしたば末娘あ、

「なえだて今日あ、おがしごどいうおんだ。いうごどなの何時でもきでんべや。

なえだや、言ゆてみる」

ていうけど。んでも爺さまあ、どうへ駄目だべど思たども、末娘あどさも言た

ど。

「実^{ずす}あなあ、近頃^{えつか}何日も雨あ降らねあべ。ほんで田さ、さっぱり水あかがらなくて、困てしまて、雨降らへでくえる人^{しと}あいれば、誰あどさでも娘くえんどもなあ、てしとりごどゆてだべ、ほしたば、猿あ今朝雨降らへでくつだなよ。ほんで困て寝つたなだ」

て言^ゆたど。ほしたば末娘あ、

「なえだて爺さまや、ほんたごど困らねあてえ。おれあ猿どさ嫁ん行てくえつさげあえ。まず、起ぎで飯食^けは」

ていうけど。ほんで爺さまあ安心^{どっか}どして起ぎで飯食たけど。

ほうして、末娘あ、猿の妻^{わけあえ}なて、山の奥さ猿ど行たどや。

ほれがら末娘あ嫁んえぐど三日目ん、ほら、三つ目ていうべ、嫁あ実家^{あに}さ聾^{あに}どご連^{っけあ}で帰えんべ。ほんで末娘も三日目ん、聾に餅つでもらて、里帰^{げあ}えりするごどんしたど。

ほうして、餅あつけつど猿の聾あ、

「この餅何さ入^へつで行^えぐや。井が重箱^{じゅうつこ}が」

て聞^きぐけど。ほしたば嫁^{よめ}あ、

「井なの重箱^{じゅうせう}さなの入^いつど、おれあ家の爺^{おや}さまあ、井臭^{いにお}せあえの、重箱^{じゅうせう}臭^くせあえ
のて食^かねあはげあえ、臼^{うす}まま背負^{しよ}て行^えてころは。取^とてくんねあが。あんまり綺麗^{きれい}
だはげあえ、持^もて行^えて、死^しだがが（母^{はは}）どさ上^あつであはげ」

て言^ゆたど。ほしたば猿^{さる}あ、

「でやでや」ていうど、背負^{しよ}てだ臼^{うす}下^{くだ}ろすどごだけど。ほしたば嫁^{よめ}あ、

「あにあに、臼^{うす}土^{つち}の上^{うへ}さ下^{くだ}ろすど、爺^{おや}さまあ、土臭^{どにお}せあえどて、食^かねぐなっさげあえ
背負^{しよ}たまま取^とて来^きてころ」

て言^ゆたど。ほんで猿^{さる}あ、

「んだが、んだが」

ていうと、臼^{うす}背負^{しよ}たまんま、川端^{かわはた}の崖^{がき}んどさ行^えて、手伸^{てのび}ばして、

「これがあ」

て叫^{こゑ}がぶけど。ほんで嫁^{よめ}あ、

「んねあ。も少す先んなよ」

て言わ^ゆつで、猿あ、ほの先んな取るかんじよして、まんさぐの木さ寄かがて、ありつたげ手伸ばしたけど。ほうすつど、まんさぐあ細えべ。ほれさ猿あ重であえ
臼背負つたべ。んだおんだはげあえ、まんさぐあ、がりがりつど折つでしまて、
猿あ、下の川さ落ちてしまたけどは。ほうしたば猿あ川の中で、

へ猿沢に流るる命は惜しぐなけれども

あどに残りし 姫を惜しからん

て言^ゆいながら流つで行ぐけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(集成一〇三「猿智入」) 話者 舟生カネヨ

25 猿 む が し

あるどさなあ、娘三人持て、三百刈りの田作^つくて暮しつた爺さまど婆さまいだ

けど。

ある時づぎなあ、何日えつかも雨あ降らねあおんださげあえ、三百刈りの田あべろつと乾へできたけどは。ほんで爺さまあ、なんだごどしたらえがべど思もて、夜んまも寝らんねあくれあ心配であつたど。ほうして、なんぼ考かんげあえだてええ工面うがばねあくて、三百刈りの田、みな割つてしまふはて困て、田見っだけどは。

ほうして、田見つだば、ほごさ猿あ出はてきて、

「爺さま、爺さま。何ほんげあえ毎日心配してんなだや」

てきぐけど。ほんで爺さまあ、

「何日えつかも雨あ降らねあおんだはげあえ、三百刈りの田あ、からからと乾かわえで、割つできたじゆは」

て言ゆたば、猿あ、

「家えにあ娘あいだんねあがや」

ていうけど。ほんで爺さまあ、

「ああ、えだえだ」て言たば、猿あ、

「ほの娘、おれあどさ呉くつでころ。ほへば田さえつぺあ水かげでくえつさげあえ」
つけど。ほうすつど爺ようじさま喜で、

「んであ、呉えつさげあえ、どうが水かげでころ」

て頼だど。ほうして次の日、爺さまあ、まだ田さ行たば、田さえつぺあ水あかがていだけど。ほごさ猿あまだ出はて来て、

「爺さま、爺さま。どの娘くえんなや」

て聞ぐけど。ほんで爺さまあ、

「まだ言ゆてねども、三人のうづ、どれがかれがくえる」て言ゆたど。

次の日の朝ま、爺さまあ、三人の娘のうづ誰か行ゆぐて言ゆてくえんだがど思もて心配で起きらんねけどは。ほごさ大つきな来て、

「爺さん、爺さん。飯食まけは」

ていうけど。ほうしたば爺さまあ、「んであ、おれあいうごどきぐがや」て言ゆたば、「きぐはげあえ、早く起きで飯食けは」ていうけど。ほんで爺さまあ、

「んであ、猿の嫁よめんなてくえつがや」て言ゆたば、

「猿の嫁なのならねあ。誰あ猿の嫁なのなるんだて」

て、怒^{こしえあ}えで、行てしまたけどは。

ほんで、爺さま困てだば、ほごさ二番目んなきて、

「爺さん、爺さん。飯食^けは」ていうけど。ほんで爺さまあ、「んであ、おれあいいうごどきぐがや」て聞いたば、「きぐはげあえ、飯食^けは」ていうけど。ほんで爺さまあ、

「んであ、猿の嫁んなてくえつがや」て言^ゆたば、

「ないだどて猿の嫁んなのなるんだて。誰あ猿の嫁んなのならねあ」

て、しこであえま怒^{こしえあ}でいうけど。ほんで爺さま大変困ては、猿どさは、くえる
て言^ゆてしまたんだし、困てしまて寝^ゆただけどは。

ほごさ今^こ度^だあ末娘あきて、「爺さん、起^ゆぎて飯食^けは」ていうけど。ほんで、

「んであ、おれあいいうごどきぐがや」て言^ゆたば、

「きぐきぐ、なんでもきぐはげあえ、まづ、起^ゆぎで飯食^けは」つけど。ほんで爺さ

まあ、「ほんであ、猿の嫁んなつがや」て言^ゆたば、末娘あ、

「なるなる。猿の嫁んなつさげあえ、起^ゆぎて飯食^けは」ていうけど。ほんで爺さま喜^{よろこ}ぶ

で、起きで来て、飯食たけど。

ほうしているうづん、猿あ来て、

「爺さん、爺さん。おれあどさ呉える嫁こあどれだや」

て聞ぐけど。ほんで爺さま三番目んなば、「これだ、これだ」て言たば、猿あ喜で、「はあ、これが、これだば言い分がねえ」て、猿あ喜では、早速家さ連で行たけどは。

ほのうづ三ツ目んなて、猿あ、

「嫁こ、嫁こ、爺さんどさ、何持てえたらえがべ」

て聞ぐけど。ほんで嫁こあ、

「んだなあ。爺さん餅一番好きだはげあえ、餅搗で持てえぐべ」

ていうけど。ほんで二人して餅搗で持て行くごどんしたど。

ほうして、餅あ搗げつど、猿あ、

「何さ入で持てえたらえがべ。重箱さでも入で持てえぐが」

て聞ぐけど。ほうすつど嫁こあ、

「ああ、おれあ家の爺さん、重箱さなの入^へつど重箱くせあえて食^かんねあ、ていうはげあえ、臼まんま持てえてころは」

て、猿あどさ、臼まま背負^えわへで行^えたけど。

ほうして、ずつと行^えたば、川端の崖^{ゆえ}の上さ、きれだ桜咲^{せあ}つただけど。嫁こあほれ
見で、

「あの桜花あんまりきれだ、一枝^{しと}とて爺さんどさ見へつであおんだなあ」
て言^いたば、猿あ、

「んであ、おれあ取てくる。臼、こさ下ろして取てくんべ」
て、臼おろすどごだけど。ほしたば嫁こあ、

「ああ、そさおろすど、爺さん土くせあえて食^かんねあていうはげあえ、背負^かた
ま取てきてくんねあが」

ていうおんだはげあえ、猿あ臼背負^えたまま桜ぬ木さ上^えがて行^えたど。ほうして、
「これあえがあ」て叫^{あが}がぶけど。ほんで嫁こあ、「もう少す梢^{てんべ}んなよ」て言^ゆたど。
ほうしたば猿あ、まだ上^{あが}てえて、「んであ、これがあ」て叫^{あが}がぶけど。ほんで嫁こあ、

「もう少す上ゆえんなよ」ていうおんださげあえ、猿あまだ上がてえて、「んであ、これてんえがあ」て叫がぶけど。嫁こあ、ほの上ゆえんな、一番ええなあ」て、猿あどご、一番梢てんえまで上がらへで、梢んな取らへるかんじよしたべ。ほうすつど細こえおんだはげあえ、取るかんじよしたば、枝がりがりつど折つでしまて、落ちできては、沢さ流つでえたけどは。

ほうして、流さつで行つぎぐ時、猿あ歌詠んだけど。

へ 猿沢に流るる命は惜しくあらねども

あどでお嫁はお泣ぎしやるらん

ていう歌だけど。

ほの娘あ家けあさ帰ええて幸福しつやわへんくらしただけど。とんびん からんこあ ねっけどは。

(集成一〇三「猿智入」) 話者 高橋キク

26 猿むがし

むがしあつたけど。

あるどさなあ、娘三人もて暮しつた爺さまいだけだよ。そうして娘達^{だう}ど、一の姫、二の姫、三の姫て呼ばていただけよ。爺さまあ、婆さまに死なつて、一人^{ひとり}で開墾おごして、ソバ植^ゆえだり、豆どか小豆どが植^ゆえでいだんだけだよ。

今日も爺さまあ、その畑^えさ行て、豆蒔ぎしつたけど。

「一粒^{しと}あ、千粒^{へん}。一粒あ、千粒」て、豆蒔つだど。ほうしたば猿あ来て、切株^{ぼっこ}さけつつかげで、

「一粒あ一粒でけづがれつ」て叫がぶけどよ。爺さまあ、まだ、

「一粒あ、千粒。一粒あ、千粒」て蒔ぐど、猿あ、

「一粒あ一粒でけづがれつ」て叫がぶけど。ほんで爺さまあ、

「猿、猿、そういうごどいうおんでねあ。おれあ家^えにあ娘三人いだはげあえ、お前^{めあえ}ほんた憎れ口^{ぐち}言てんなで、おれの豆蒔ぎでも手伝たらええんねあが。ほへば、お

れだて、三人いだうち、どの娘くえんぞ」

て言^ゆたば、猿あ喜で、

「んだがつ」ていうど、木の切株^{ぼっこ}がら下りて来て、豆蒔^{まめ}ぎ始めだど。

「一粒あ千粒、万粒。一粒あ千粒、万粒、千粒万粒、万粒千粒」

どて蒔^めだけど。猿の手伝^{てつで}あえ、手あ利^きだおんだはげあえ、爺さま二日も三日もかがつどご、たった一日で出がしてしまたけどよ。

そうして、猿に蒔^めでもらたどごで、

「猿、猿、人間づおのお、育でるにあ、容易からねあごどであ育でらんねあおんだはげあえな。ただ豆蒔^{こやし}つばなしであ娘一人呉えらんねあ。これがら今度^だ秋まで、こさ肥料持て来て置くはげあえ、草生^おえだら草むして、ほうして肥料かげで、中耕^{さぐり}くつで、そうして、なんぼなんぼ豆收穫^とらねあば出来^げねあはげあえ、それ收穫^とるようにしねあば、娘くえらんねあ」

て、猿あなんぼ賢^{はし}けあえたて、爺さまにはかなわねあ。そういう約束^{さくそく}さへらっ
だけどよ。

「んだが爺さま、ほんであえ、ほの豆立派んとるまで一生懸命すつさげあえ」
て約束して、猿あ山さ行たけどよ。

ほうしているうづん、ほれ夏も過ぎ、秋あきたべ。猿あなんぼが一生懸命した
おんだんだが、豆あ上作で、えっ。あとつだけど。ほんで猿あ爺さまどさ、

「爺さま、爺さま、豆あ上作だおん。ほのうづ約束の嫁もらいん行くぞ」
というけど。爺さま家さ帰てきて、娘達あの顔みで、

「なんだて困たは、豆なの蒔でえがったんだが、蒔がねあでえがったんだが」
どて、困ては起きらんねあぐなてしまたけどよ。

ほうして寝っだどさ、一番大つき娘あ来て、

「爺さま、爺さま、飯あがらっしえは」

というけど。ほんで爺さま、

「おれあ言うごと聞ぐごつたら飯食うし、聞がねあごつたら飯なの食ねあ」
て言たど。ほしたば一の姫あ、

「爺さまのいうごとだば、なんでもきぎ申す、きぎ申す」つけど。

「ほんであ猿の嫁わけあえなてくえつがや」て言ゆたば、

「ないだどや。猿の嫁や大蛇の嫁ならんねべ」

て怒では、爺さまの枕、足でけつとばして行えてしまたけどよ。

「ああ、ああ、人間だおの、もつともだ。猿あどさだおの、おれあそういう約束まづげあえすんな間違まちがえであつた」

ど思もて、弱がて寝おつたど。

ほうしたば今度二番目あ来て、

「爺さま、爺さま、飯まあがらつしえ」ていうど。爺さま、

「おれあいうごどきげば食うし、おれあいうごどきがねあごつたら、飯えなの食ね」
て言ゆたど。ほしたば二の姫あ、

「爺ぢやさまいうごどきぐ」ていうはげ、

「んだら猿の嫁わけあえなてくえつが」て聞きたら、

「なえだどや。猿の嫁や大蛇の嫁に、人間がならんねあべ」

て、二の姫もしこであま怒こしえで、足で爺さまの枕ふんごろばして、行えてしまたけ

ずおんほれ。

「ああ、ああ。一人したりにほぞ（弾じかれる）さつだ。三の姫あ、ほれより嫌やだべあ、小ちやこえなだおの。これあ困つたごどした。猿あどき嫁くんねあば、なんぼ月もかがてえぐした畑、一晚しとで荒さつでしまうは」

ど思もて、困て困て泣き口説くどえつだどよ。

そうしていつどき、三の姫あ来て、

「爺さま、爺さま。早ぐ起かぎで、飯食かつしえ」

というけど。ほんで、

「おれあいうごど聞ぐごつたら食うし、きがねあごつたら、飯ままなのかんねあ」
て言ゆたべ。そしたら、

「んであ猿の嫁よめんなくてくえつがや」

て、爺さま言ゆたば、三の姫あ、

「爺さま、見込みあてくえんなだば、猿の嫁だて、大蛇さだて、どごさだて行くはげあえ、起たぎで飯食は」

ていうけどよ。ほうすつど、爺さま喜で、

「ほつが、ほつが。ほんであ猿の嫁なてくえつがや」つたど。

「なる、なる」て、三の姫あいうおんだはげあえ、爺さま喜で、喜で、

「えがった、えがった。んであ早速嫁入り仕度しねあんねあ」

どて、そうして衣装買いん行ただけどよ。

そうすつど、今度、姉達あ、

「おれ家の三の姫あ、猿の嫁んなつどごだどよ」

て、沢山馬鹿んして、大変笑うけど。んでも三の姫あ、「親のいうごだば仕

方ねあべ」ていだけど。そうして、爺さま帰えて来たば、姉二人あ、あんまり馬

鹿んして、笑い過ぎでは、烏んなてしまたけどよ。

爺さま、町さ行て、小袖がら種々の着物買てきて、嫁仕度しつたけど。そうし

ているどさ、「嫁入り何時何日するや」て、猿あ決めん来ただけどよ。爺さま暦見

で、

「んであ、何時の何日、日あええさげあえ」

て決めて、その日なつど、まづ、祝事^{ゆわるとし}して、猿あ家^えさ送^えくて行^えがねあんねあ、ど思^もて、山こ廻^{へんぐ}り廻^{へんぐ}り、三の姫ば駕籠^{かろう}さのへで行たど。姫あ窓こ開^あけ開^あけ見^みながら行たど。

そうして行たば、岩この間細道^{えまた}こあ、あつどさ行たば、笹で作^{こしえ}た家こあ、あつけどよ。ほうしたば、猿あ、「こごだ、こごだ、姫こ」つけど。「んだが、んだが」て、ほごさ行て、ほうして、爺さま、ほごで祝事^{ゆわるとし}してくつで、帰えて来たけどよ。

ほうして、三日目さなつど、猿あ、

「お前家の爺さま何好ぎだや」て聞^きぐけどよ。ほんで三の姫あ、

「おれあ家の爺さまあ、餅好ぎだなよ」て言^ゆたけどよ。猿あ、

「んであ、今日あ三つ目だおの、餅でもつで持て行ぐべ、なあ姫」

「んだな、餅なの持て行たら、なんぼが喜ぶんだがや」

「んであ、餅つぐべ」て、餅つで、猿あ、

「んであ、水どりしてえぐが、粉餅^{こ餅}（粉をつけた餅）してえぐが」

てゆたば、三の姫あ、

「粉餅^こんすつど、粉臭^こせあえて食ねあ」

「んであ、水どりしてえぐが」

「水どりすつど、水臭^{みづ}せあえて食ね」

「んであ、臼^うさ入だまま背負て行くが」

「ほだば、なんぼが喜ぶんだがや」

猿あ、馬鹿なおんだはげあえ、臼^うまま背負たど。ほうして、山^{さん}さ廻^{めぐ}り廻^{めぐ}り来た

ば、崖^{がき}さなべで（なびいて）桜花^{せあえ}咲でだけどよ。あんまり綺麗^{きれ}だはげあえ、姫あ

立ち止^どまで、黙^{だん}まで見^みつだと。猿あ、

「姫。姫。何見^みつだや」つけど。

「ああ、あの桜花^{せあえ}あんげあえ綺麗^{きれ}だおの一枝^{しち}折て行て、おれあ家の爺^{おや}さまどさ見

へだら、なんぼが喜ぶんだがや」

ていうおんだはげあえ、

「んであ、おれあ折^おつてくつが、臼^う下ろして、おれあ折^おてくる」

つけど。三の姫あ、

「ああ、臼土の上さ下ろへば、爺さま土臭せあえて、食ねあぐなるおの」

「んであ、おれあ背負て折てくる」

て、臼背負たまま、猿あ、ほの桜ぬ木さ上さ行て、

「んであ、姫、これがあ」

ていうど、枝がりがりつどぶつ欠げでは、猿あ臼背負たまま、崖の下さ落ちで
えてしまて、臼の下んなて、死でしまたけどは。

猿あ死でしまたんだし、今度あ三の姫あ、猿あ小屋さ戻て、小袖がら衣装がら
自分おの背負て、家さ帰えんべど思て来たずおん。

良い衣装着て、良い女子んなて、ずっと来たば、八卦おぎど行き会たけどよ。

ほしたば、八卦おぎあ、

「姉さん、姉さん。どこまで行ぐどこだ」

「こういうわけで、家さ帰えて行ぐどこだ」

「ああ、んだが、んだが。んであここがら二町ばり行ぐど、こういう金持家で、
ほこの家の旦那あんさん(若旦那)、この間嫁死なへでいだはげあえ、そこさ行て、

そこの家の火焚ぎする。そうして、ほのままだど、お前めあえ、あんまり綺麗きれで駄目だはげあえ、この姥笠んばかぶれ。この姥笠おのかぶつど、丁度えあんべあの婆さんなつさげあえ、それ脱めあえがねあで、かふたまま、そこの家さ行げ。

そうすつど、お前めあえ、そこの家の嫁しんしよなるえし、そうすれば、やがてあそこの家えの身上しんしよきりまわへるようになつす、すばらす財産家のかがさまなて、樂々ど暮へつさげあえ、まづ、そさ行て火焚ぎ婆さんなれ」

て言ゆわつたおんだはげあえ、

「んだが、んだが」

て、八卦おぎあ突出つだした、姥笠おのずおんのかふてみだど。そしたば、萎びだ、丁度ええ婆おやがたしゆさまんなたずおんほれ。

そうして、小荷物こもくらこ背負て、その金持家の家さ行たけどよ。女中あ出はて来たはげあえ、

「あつこつ歩ありて、置えでくえつどごねあんだがど思もて、訪ねで歩りたども、どごでも置えでくれつどごあねあおんで、困て来たあだども、なんとが火焚ぎでも

ええはげあえ、さへで、置えで下はれ」

て頼あんさまだけだよ。そしたば、

「若旦那あんさまさ行て聞でくる」

て、若旦那しとさ聞ぎん行たけどよ。ほしたら若旦那、

「その人もゆぐゆぐ困て来たなだべあ、ああ、ああ。んであ、置げ、置げ」

ていうけどよ。女中あ、

「いで下はれど」

て、そうして、置えでもらうごどんなて、

「おれあ、こげあえた汚ねあ体いなだはげあえ、稲部屋いなさでも床こしえで、稲部屋さ

泊めどころ」

て、稲部屋さ泊めでもらて暮しつたけどよ。

すつど、その家の人達しだちあ、稲部屋ゐあさ入て、ちぢこまてるよだ婆わけあえおのさまだども、

綺麗きれがだ好きだし、かまの火焚じよんぎも上手だし、鍋釜磨ぐたて上手だし、若者わけあえおのみであ

んしやんしやんどして、まづまづ、こげあえた婆わけあえおのさまいねあて、皆賞めつけだよ。

「ほれあえがった。何でも食うおの食^かへで、なんぼ若い時^{つぎ}あ、あたたて、今^{いま}婆^ばさまなんだはげあえ、^{いたわ}勞^{らう}て使^{つか}え」

て、そこのおつかさんが言^ゆていであつたどよ。

ほうして、婆^ばさまあ、夜んまの水屋^{みじやしめ}仕舞^{しめ}終^はつど、稻部屋^{いんべ}さ行^えて、百^{もも}奴^のろーソグ^ろつ^つけで、毎^{まい}晩^{ばん}本^{ほん}読^よみし^して^てるお^おん^んだ^だけ^けど^どよ。そう^{そう}し^して^てい^いつ^つず^ずき、或^{ある}晩^{ばん}、若^わ旦^{たん}那^なお^おし^しつ^つこ^こた^たれ^れん^ん起^きぎ^ぎだ^だけ^けど^どよ。ほう^{ほう}し^した^たば、婆^ばさまの^のい^いる^る稻^い部^べ屋^や、あ^あん^んま^まり^り明^あり^りお^おん^んだ^だは^はげ^げあ^あえ、不^ふ思^し議^ぎし^して、

「なんだて、火^か焚^{たき}ぎ婆^ばさま^まん^んど^どご^ごあ、め^めつ^つぽ^ぽ明^あり^りお^おん^んだ。火^かでも危^あね^ねあ^あぐ^ぐす^すつ^つど^どご^ごん^んね^ねあ^あべ^べが」

ど^も思^{おも}て、そ^そつ^つと^とす^すぎ^ぎ見^みし^して^てみ^みだ^だど^どよ。ほう^{ほう}し^した^たば、婆^ばさま^ま綺^き麗^れだ^だお^おん^んで、ま^まず^ずは、牡^お丹^{たん}の^の花^はの^のよ^よだ^だお^おん^んだ^だけ^けど^どよ。ほう^{ほう}し^して、き^きち^ちん^んと^と坐^ざわ^わて^て本^{ほん}読^よみ^みし^して^てい^いだ^だあ^あだ^だべ。若^わ旦^{たん}那^など^どで^でし^して^てし^した^た(お^おど^どろ^ろい^いた)、て^てい^いう^うた^たえ^えん^んだ^だが、見^みど^どれ^れだ^だて^て言^ゆた^たら^らえ^えん^んだ^だが、ぼ^ぼう^うつ^つと^とな^なて^てし^しま^また^たけ^けど^どよ。

昼^{ひる}間^{かん}見^みつ^つど火^か焚^{たき}ぎ婆^ばさま^まだ^だべ。好^こぎ^ぎん^んな^なた^たは^はげ^げあ^あえ、も^もら^らて^て呉^ころ^ろても^も言^ゆわ^わん^んね^ねあ

べ。若旦那あ、とうとう恋の病ていう病氣さかがてしまたけどよ。そうして、あつ
つの医者、こつつの医者て、あらゆる医者さかがたて治らねあくて、だんだん飯
もろぐに食ねあぐなてしまたけどよ。

ほうしていだどさ、三の姫あどさ姥笠かぶれて言た八卦おぎあ来たんだけどよ。
ほうしたば、ほれ、苦ねあば、^{へつ}なんたおのさだて、たぐづぐおんでな、

「ああ、八卦おぎさん、ええどぎ来てくつだ。まず、おれあ家さ入て下はれ。^{へあ}お
れあ家の若旦那の病氣あ、治るおのやらなんとだおんだが、^{くだ}どうがしとづ八卦お
えで下はれ」

て頼だどよ。

「んだが、んだが」て、八卦おぎあ、^{こんだ}今度あ、箸みであだおのざぐざぐとさへで、
二本襟さ射して八卦おえだずおん。

ほうして、ほの八卦おぎあ、そこの家のお母さんさいうけど。

「八卦さ出だとおりに言てえなですか」て。

「ああ、ああ、えげあえすえげあえす」

「ああ、この人との病氣あ病氣であなあ。恋の病いていうおんだはげあえ、えつ
まねあ
べあいる女中のうづの誰がど一緒ならねあば治らねあ。ほの女中達一人一人に
しとり
賄作らへで、一人一人、若旦那どさ持て行がへで、ほれ食へでみる。ほうして、
食へだ人ど一緒んさへろ。そうせば治る」

て、こう言うずおん。ほんで、そこの家のお母さんが女中達皆呼ばて、

「お前達一人一人、賄作で、若旦那どさ食へでみる。若旦那さ食へだ人ど一緒
めあえ
んさへつさげあえ」

て言たば、女中達あ食へであえおんだはげあ、一生懸命なて賄作で、化粧して、
ゆ
若旦那どさ、代る代る持て行たども、誰も食へかねあだどごだどよ。あどあ今度あ、
こんだ
婆さま一人なたとよ。そうすつど、お母さんが、婆さまどさ、

「ああ、ああ、あどお前ばんだは。お前もお風呂さでも入て、小綺麗んして、若
めあえ
旦那どさ食へん行てころ」

ていうけど。婆さまあ、

「ああ、ああ、私なの行くまでんねあ」
わたす

て断ことわつけどよ。ほんでもお母さんが、

「なんとが助もけると思おもて、食へん行てころ」

て、なんべんも頼むおんだはげあえ、行くごどんしたけどよ。

ほうすつど、女中達あ、皆婆んば頼まつだどて、しこであえま笑うなけどよ。

婆さまあ、お母さんがら膝つで頼まつだんだし、自分部屋おわさ行て化粧して、小袖

着て、すわすわどきたけどよ。ほしたば女中達あびつくりしてまたけど。今いまま

で婆さまだどばり思つたな、風呂さ入て、手足がら体すつかり洗て、化粧して、

ええ着物きたば、ほれこそ、ここら辺りでの見らんねあ、ええ女子なて出はて

来たおんだはげあえ、皆たまげでしまたけどよ。

ほうして、お膳じえん持て、若旦那どさ行たら、若旦那、見るより早ぐ、もつこら起

ぎで、手握てしめで、喜で飯食たけど。

ほんで、三の姫あ、ほごの金持家の若旦那ど一緒なて、安樂ん暮したけどよ。

とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(集成二〇九、一〇三「姥皮」「猿簪入」) 話者 栗田チウ

27 雀むがし

むがしあつたけど。

あるどさなあ、雀あいで、藪さ巢作たけど。ほうして、巢さ卵三つ産したけど。

ほうしてなあ、早ぐむえろ、早ぐむえろて、大切^{であじ}んして暖めただけど。ほしたら
ほごさ猿あきて、

「雀々、何しったや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ、

「卵暖めっただなだ」て言^ゆたど。ほうしたら、

「なんば産^なしったや」て聞ぐけど。ほんで雀あ、「たった三粒^{みつつぶ}だ」て教^{おへ}だど。ほし
たら猿あ、ほの卵食いであくて食いであくてだどや、

「三粒も産したなが。んであ一粒食^かへろや」

ていうけど。ほうすつど雀あ困て、

「たった三粒はんで産^なさねあなだおの、惜^{いだま}しくて食へらんねあ」

て言たど。んでも猿あ食いであくて、

「んだら、今夜夜討ぶちん来て、お前どごも食てしまうぞ、ほんでもえなが」
て、おどすけどや。雀あ恐ねあぐなてしまて、仕方ねあ、

「んだら、これ一粒だけだぞ」

て、大事んしつた卵、一粒猿に取らつでしまたけどは。なんぼが惜しがったんだがやあ。ほして猿あほの卵、いぎなりすんと飲でしまたあだど。雀あ恐ねあくて、恐ねあくて、巢の中でたあだふるえっただけどは。

ほしたら猿あ、まだ、手出してよごして、

「あんまり美味え卵だ、一粒ばんであ食たけねあ、も一つ食へろ」
ていうなだけどや。雀あ、おかねあがったども、

「あどたつた二粒はんてねあなだおん、惜しくて、とでも呉えらんねあ」
て断たど。ほしたら猿あ、恐ねあ顔して、

「んだが、んだらえつ、んだら今夜夜討ぶちん来て、お前どごも食てくえる」
て、おどすなだけどやあ。雀あ、恐ねあくて恐ねあくては、たつた二粒はんで

ねあつたども、泣きながら、

「あどなんずんしたて呉えらんねぞ。これ一粒だけだぞ」

て、猿あどさ、惜し卵くつでしまたど。ほしたら猿あ、ほの卵持て溝へぎぽんとま
であえで、まだくひようしん、ほの卵ぺろつと飲でしまたあだどは。

ほうして、まだ雀あどさ戻て来て、

「雀々。折角、今いまもらた卵、溝へぎまたぐど思て、跳ねだら、卵溝さ落どしてしまて、

見ねあぐしてしまたは。んだはげあえ、もう一粒けろや」

ていうけどやあ。雀あ困てしまて、返事出来ねあくて、泣ねつだど。ほしたら猿あ、

「んだが、泣で返事さんねあくれあえ惜しなで、くえらんねあごつたら、ほれで
もえ。今夜夜討ぶぢんきて、お前まへどごもぺろつと食つてけつさげあえ」

て、雀あどご威おどすなだけどやあ。雀あ恐ねあくて恐ねあくて、泣きながら、ほ
のたつた一粒はんで残ごてねあ惜し卵、仕方ねあぐくつでやてしまたけどは。

雀あめんごがていた卵であえつたんだおん、ただ泣げで、泣げで、仕方ねあく
て、おえおえて泣ねでいだけどは。

ほうしたら、ほごさ、どしんどしんで、音あして、臼あ来たけど。ほうして、雀あどさ、

「雀々、なして泣^ねっだや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ泣きながら、

「たった三粒はんで産さねあ大事だ卵、猿におどさつで、みな取らつでしまて、惜しくて泣っだなだ」

て教^おへだど。ほしたら臼あ、

「なえだて、あの畜生^{ちくしょう}猿あ、随分^{ぜいぶん}むぞせあえごどするおんだ。よしよし。泣ぐな泣ぐな。必ずおれあ、仇とてくえっさげあえ」

て言^ゆてくえっけど。

ほうしているうづん、ほごさ、ぶーん、ぶーんという音あして、大つきかめ蜂あ来て、

「雀々、なして泣ぐや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ、

「たった三粒はんでもだねあ、大事だ卵、猿に取らつてしまて、惜しくて泣っただ」

て言たど。ほしたば、かめ蜂あ、

「あの、えぐな畜生あな。仇とつてくえっさげあえ泣ぐな」
ていうけど。

ほうしているどごさ、今度あ、びたらつ、びたらつていう音あして、牛うしの糞あ
来たけど。ほうして、牛の糞あ、

「雀々、なして泣っただや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ、

「めんごくで、大事んしつた、たった三粒の卵、猿におどさつで、食つてしまた
はげあえ、惜しくて泣っただなだ」

て教おへだど。ほしたら牛の糞も、

「憎え猿だごど。人しんの惜いだましおの取りあがて、よしっ泣ぐな、泣ぐな。仇とつてく
えっさげあえ」

て言てくっただけど。

ほうしていただ、まだ、がさがさど大つき蟹かにあ来たけど。ほうして、蟹も、
「雀々、なして泣っただや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ、

「たった三粒はんて産さねあ、大事だ卵、猿にむりむり取らったださげあえだ」
て教へだど。ほれ聞ぐど、蟹も怒で、

「なんだて、あのえぐなし畜生あな。えっ。仇とつてくえっさげあえ泣ぐな」
て言てくっただけど。

ほんぎやあしてつどごさ、ころころど栗あ転ころで来たけどや。ほして栗も、

「雀々、なして泣っただや」

て聞ぐけど。ほんで雀あ、

「三粒はんねあえ、大事だ卵、むりむり猿にとらっでしまて、惜しくて泣っただな
だ」

て言たど。ほしたら栗も、

「なえだてむぞせあえごどする猿畜生だごど。泣ぐな泣ぐな。仇とてくえつきげあえ」ていうけど。

ほんで、臼どかめ蜂ど牛の糞ど蟹ど栗ど五人集^{あつ}ばて、仇討^{ぶぢ}の相談したど。ほうして、まづ臼あ、猿家の入口^{へありぐち}の屋根^{ゆゑ}の上さあがるごどんしたど。ほして、牛の糞あ入口んどさ、かめ蜂は座敷^{あがりかまち}の敷台^{みじや}んどさ、蟹あ水屋の水桶^{みじや}ん中さ、ほうして、栗あ囲炉裏^{ゆるり}のほどの中さかぐつでいるごどんしたど。ほうして、猿あ家がら出はんな待ちつたど。ほのうづん、猿あ、自分家^{おわえ}がら出はて、どさが行^えたけど。ほうすつど五人あ、猿の家^えさ行^えて、自分持場^えさかぐつでだど。

ほのうづん、猿あ自分家さ、

「ああ寒み寒み」

て来たけど。ほうして、家^えん中^{へあ}さ入^あて行^えて、火箸で囲炉裏^えのほど、じよぎじよぎど突^えづで、手出^えしてあだ^えただけど。

ほうすつど、ぼどん中にいだ栗あ、ばえんと弾^{はつ}けだずおん。ほうすつど、ほどのおぎがら熱^あつ灰^{あぐ}がらべろつと、猿あ顔^{つら}なの腹^{はら}なのさかがたべ、猿あ熱^あつがて、

「あつ、あつ」てほろたども、あつこつ火傷^{やけど}しては、あつおんだはげあえ、水屋
さ走して行て、水桶ん中さ、ざんぶり入たど。^{へあ}

ほうすつどほれ、蟹あかぐつでだべ、こんだ蟹に手がら足がら、けつつまで、
じよぎじよぎと挟^{おもて}まつでは、猿あ、「痛^いであ痛^いであ」ていうど、水桶がらがえら出
てきて、外^{おもて}の方さ走て行たど。

ほうして、座敷の敷台んどごまで走して来たべ、今度ほごさかぐつでだかめ蜂あ、
ぶーんて出はてくつど、猿あ顔がら頭がら、体中じくじくと刺したど。猿あ痛であ
くて痛であくて、「ああ、ああ」て泣きながら、外さ逃げたど。^ね

ほうすつど今度あ、入口^{へありぐつ}んどさ待ちつだ牛の糞^{ふん}さ、ずえらふんずらべで転^{ころ}だど
さ今度あ、屋根の上^{ゆえ}さいだ臼^{うす}あ、

「猿畜生、雀の仇^{あだ}だぞ」

ていうど、臼^{うす}あ屋根の上^{ゆえ}がら、どさつと落ちできて、猿あどご、びつちより潰^{つぶ}
してしまたけど。

ほんで、ろぐでなし猿あ、死でしまて仇とらっただけどは。んだはげあえ、弱者^{おの}

いじめおんでねあど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(集成二九「雀の仇討」) 話者 高橋良雄

28 屁つぺり爺

むがしあつたけど。

あるどさなあ、爺ど婆んばいであつたど。爺あまだなあ、毎日田さ行たり、畑仕事なのしてであつたど。ほうしてなあ、今年あ餅米もええぐ出来だんだし、豆も沢山とつだはげあえて婆んばどさ、

「婆んば、婆んば、今年あ餅米もええぐ出来だし、豆も沢山とつだはげあえ、黄粉餅でもこしえて食うがや」

て言たけど。ほんで婆んばも、

「んだな爺、黄粉餅なの暫く食たごどあねあはげあえ、んであ搗で食うがや。な

んぼがんめあえべな」

て、二人あ相談して、黄粉餅作るごどんしたど。

ほうしてなあ、夜んま婆んば豆炒て、黄粉作だど。ほうして二人あ寝るごどんしたど。んでも下さ置けば猫になめらえんべす、上の棚さあげで置けば、ねずみに食れんべす、何所さ置えだらええべと思て、困ては、婆んば、

「なあ、爺。この黄粉、下さ置けば猫になめらえんべす、上の棚さ置けば、ねずみに食れんべす、仕方ねあ、おら達寝る間さでも置えで寝つがはや」
て言たけどや。ほんで爺も、

「んだな、んであ仕方ねあ、ほげあえんすんべ」

ていうごどんなて、ほの黄粉、爺ど婆んば寝だ間さ置えで寝だけど。

ほうして、ほのうづん、夜中んなたべ、ほしたば、ほのうづん爺あ、すこであま大つき屁、ぶうーっどたつだど。あんまり大つき屁たつだおんだはげあえ、黄粉あみな飛でしまたけどは。

ほうしたら、上でねずみあ、

「爺あ屁の実あ、んーめんめ」

下であ猫あ、

「爺あ屁の実あ、んーめんめ」

てたあだ鼠と猫に、黄粉なめらつでしましたけどは。とんぴん からんこあ
ねあつけどは。
(集成三八八「爺婆と黄粉」話者 高橋良雄)

29 屁つぺり爺

むがしあつたけど。

むがしあるどきなあ、爺さまど婆さまいてあつたど。

ある時^{とき}なあ、爺さまあ庭掃^{はき}ぎしたど。ほしたば、庭さ豆あ一粒^{しと}落ちつたな見つけ
だけど。爺さまあ、

「あらつ、豆あ一つ落ちつたじゆは。婆さま、婆さま、この豆なんぞしたらえが

べ」

て、婆さまどさ相談したど。ほしたば婆さまあ、

「んだな爺さま、一粒ばりだおん、んであ半分は種子んして、半分ば黄粉こしえでも作つが」

て、半分に分げで、半分種子んとて置えで、半分ば婆さま黄粉こしえん作だど。

ほうして、ほの黄粉、どごさ置えだらえべて、二人あ相談したりしたど。下さ置げば

猫ん食れんべし、上さ置げば、ねずみに食れんべし、ていうなで、仕方ねあはげあえ、

爺さまど婆さま寝る間えあださ置えで寝んべて相談して、二人あ寝る間さ置えで寝だど。

ほうして、夜中んなつど、爺さまあ、すこでま大つき屁、ぶうつどたつたずお

ん。ほしたば、爺さまど婆さまの間さ置えつだ黄粉あ、みなふつとばさつでしまたけどは。

ほしたば下であ、猫あ、

「爺あ屁の実あ、んーめんめ」

上であ、ねずみあ、

「爺あ屁の実あ、んーめんめ」

て、猫とねずみあ、みななめでしまたけどは。

（集成三八八「爺婆と黄粉」）話者 高橋久雄

30 屁つぺり爺

むがしむがしあつたけどせあえ。

あるどごさなあ、貧乏だ貧乏だ爺さまど婆さまいだけどせあえ。爺さままだ、毎日山えさ行て、薪集あづべあ、婆さまどご喜ばへだりして暮していだけどせあえ。

ある時なあ、爺さまあ、

「婆さま、婆さま、今日も天気あええはげあえ、沢山えつべあとてくつさげあえなあ」

て、出がげで行たど。婆さまあ、爺さま年としよ寄りなんだし、

「んだが、んであ、気つけで行てこえちや」

て、見送てやたど。

爺さまあ、山さ、「どっこえしよ、どっこえしよ」て言いながら登て行くけど。
ほうして、あつつ眺め、こつつ眺めしながら、ぎっこ、ぎっこ木伐ったけどせあえ。
ほうして木伐ったば、下の方がら、

「ほごで木伐る者あ、おの何者だ」
だれおん

て、誰が叫がぶけどせあえ。爺さま驚して下見だば、殿さまいだけど。ほうして、

「ほごで木伐る者あ、何者だ」

て叫がぶど。爺さまあ、殿さまに怒がったと思て、こしや恐ねくて、ふるふるふるえながら、

「長者どの屁っぺり爺だ」

て言たど。ゆほしたら殿さまあ、

「んだら、一つつたでみろ」

というけずおん。んだら、というど、爺さま、

ちちん ふいふい

にしきさらさら

ごようの松原 ぶー

ど、すこであま大つき屁たつで見へだど。ほしたら殿さまあ、

「あんまり上手だ、もう一つたつでみろちや」

ていうけど。ほんで爺さまあ、んだがていうど、また、

ちちん ふいふい

にしきさらさら

ごようの松原 ぶー

ど、やて見へだおんださげあえ、殿さま面白^{おもへ}がて大喜びしたど。ほうして、ご

ほうび沢山爺さまさ呉^{でつち}ただけど。爺さま家さ帰^{けあ}えて来て、婆さまどさ、

「婆さま婆さま、まずまず見ろちや。殿さま屁たつでめへろていうおんだはげあえ、
たつでめへだば、面白どて、こんげあえごほうび呉ただけ」

どて、婆さまどさ見へだば、婆さまあ、

「なんだて、屁たっだばりで、こんげあえごほうび呉っただけどこ」
て、二人あ大喜びしっただ。

ほしたば、ほごさ隣りの欲ばり爺あ来たけどせあえ。ほうして、
「なえだて、二人^{したり}してめつぼう喜んだおんだな。なしてほんげあえ喜でいるおん
だや」

て聞くけど。ほんで爺さまあ、

「今日、おれあ、山で木伐ったば、殿さま来て、ほごで木伐る者あ、何者だてい
うはげあえ、長者どの屁つぺり爺だて言^ゆたば、んだら一つたつてみろていうけな
よ。ほんでおれあ、ちちん、ふいふい、にしぎさらさら、ごようの松原、ぶーど
たつてめへだなよ。ほしたば殿さま面白^てどて、喜で、ごほうび沢山呉^{てつち}っただおんだ
さげあえ、婆さまど二人あ、大喜びしっただごだ」

て教^おへだど。ほしたば、隣りのよごばり爺んじあ、

「ほれあええごど聞^きだ。んだら、おらあ、明日行てみねあんねあ」
て行たけど。

隣りのよごばり爺んじあ、次の日起つとすぐ山さ行て、だきん、だきんど木伐りながら、殿さま来んな待つただけどせあえ。ほうしていただば、ほごさ殿さま来たけど。ほうして、

「ほごで木伐る者あ、何者だ」

て、やっぱり叫がぶけど。ほんで欲ばり爺んじあ喜で、

「屁っぺり爺だ」て言^ゆたば、殿さまあ、

「んだら一づたつでみる」て言^ゆたおんださげあえ、爺さまがら聞だとおり、

ちちん ぷいぷい にしぎさらさら ごようの松原 びびー、びー。

どしたど。殿さまあ、ほれ聞て、なんだが妙^{おが}し、こ汚ねあ音だよだど思^もて、

「今のあ、おかしぞ。も一ぺんたつでみる」て言^ゆうけど。ほんでまだ、

ちちん ぷいぷい にしぎさらさら ごようの松原、ていうど、

「びびーびーびびー」

て、先だんなよりひでえ音さへでしまたけどせあえは。

ほうすつど殿さま怒て、

「この糞たれ爺んじあ、こ汚ねあ屁たれあがて、引張り出して、叩ぎづけろ」
て、縄でふんずべあらつて、沢山^{すこたま}ただがっただけどは。ほうして殿さまあ、

「こら爺。欲ばて人の真似^{まね}すつさげあえ、ろぐだごどあねあなだ。こんたごどし
たて駄目^{だめ}だぞ」て、沢山^{すこたま}怒^{こしや}がっただおんださげあえ、欲ばり爺んじあ、

「今度^だから決^だつしてしあへんさげあえ、どうが許^{ゆる}してころ」

て、べそかぎながら謝^{あやま}りたけどせあえ。ほうして本当の屁つぺり爺あ、金持^{かねもち}づ
んなて、婆さま^{ばさま}ど幸福^{しつやわへ}ん暮^くしたけど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

(集成一八九「屁ひり爺」 話者 高橋ミヨ)

31 屁つぺり爺

むがしあつたけど。むがしあるどさなあ、爺さまいだけど。ほの爺さまじゆあ、
うんと屁^{しよん}たれの上手^{うへ}だ爺さまであつたど。

「爺さま爺さまあ、お前、屁たれうんと上手だつけあ、一づたつでめへろや」
なていうど、何時でも、

「でやでや。んであ一づたつでみつが」
ていうど。

「あやちゅうちゅう、にしぎさらさら、ごようのまだがら、ちちんぱりん、ぷー
ぷ。ふん、ぶー」ど、たつてめへつがったど。

お城の殿さま、ほの話聞で、「ほんげあえ珍らし屁たえんが、ほの爺さまどこ
連でこえ」て、家来どさ言いづげだど。家来あ爺さまどこさ行て、

「爺さま、爺さま。殿さまあ、来て屁たつでめへろど」

て、爺さまどこ、お城さ連で行たど。ほしたば殿さまあ、

「屁っぺり爺というのはお前が。よぐ来たな」ていうけど。ほんで爺さまあ、
「んです。私です」わたして言たば、殿さまあ、

「お前は珍らしい屁をたれるそうだが、どんな屁たれつが、まず、早速たつでみ
ろ」て、いうおんだはげあえ、爺さまあ、

「んであ、早速たつてみあすべ」ていうど、「あやちゅうちゅう、にしぎさらさら、ごようのまだがら、ちちんぱりん、ぷーぷふん、ぶー」どたつてめへだど。殿さま喜で、

「これは面白い。あんまり上手だ。もう一づ^{しと}たつてみろ」

て賞めらつたおんだはげあえ、爺さまあ、

「んですか。んであ、もう一づたつてみあすべ」ていうど、まだ、「あやちゅうちゅう、にしぎさらさら、ごようのまだがら、ちちんぱりん、ぷーぷふん、ぶー」どたつだど。ほんで爺さま、殿さまがらすつかり賞めらつて、えつぺごほうび貰らたけどや。

ほうすつど、ほの話聞で、隣の欲ばり爺んじあ、「屁なの、おれだて、なんぼでもたえられる。んであ、おれも殿さまさ屁たつてめへで、ごほうび貰わねあんねあ」ていうど、生栗しこであま食て、お城さ行て、

「屁っぺり爺あ、屁たつてめへん来あした」

て叫がだど。ほしたば、門番、くぐり開げで、「何用だ」て聞だけど。ほんで、

「屁つぺり爺あ、殿さまさ、屁たつでめへん来たあです」

て言^ゆたど。ほしたば門番が、

「んだが。んであ殿さまさ言^ゆてくつさげあえ、一寸待で」て、殿さまさ聞ぎん行たば、殿さまあ、「ほつが、んであ連^つで来え」ていうはげあえ、爺どご連で行たど、ほしたら、

「屁たれ、ほんげあ上手^{じょう}だが、んであたつでみろ」

つけど。ほんで欲張り爺んじあ、んであこれあごほうび貰うえど思^もて、

「んであ、早速たつでめへあす」ていうど、

「あやちゅうちゅう、にしぎさらさら、ごようのまだがら、もつてまいるは、ちちんぽんぽん」ていうど、「びーびびびー、びー」て、ひどえ音さへでしまたけどは。ほうして糞^{もろみ}まで出してしまたおんだはげあえは、ほの臭^くせあえごど、臭^くせあえごど、側近所にいらんねあけどは。

ほんで殿さま、あんまり臭^くせあえおんだはげあえ、鼻つかで、怒^{こしえ}で怒で、

「この糞たれ爺んじあ、みだぐねあ、棒ただぎんして、お堀さぶち込んでしまえ」

て、奥^{ひこ}さ引込^{ひこ}でしましたけどは。欲^ほばり爺^{おや}んじあ、ごほうびどごんねあ、棒^{ぼう}で百も叩^{たた}がつて、お堀^{ほり}さじゃつぽりぶつ込^こまつでしましたけどは。とんぴん からんこあねあつけどは。

(集成一八九「屁^へひり爺^{おや}」) 話者 高橋良雄

及位の昔話 (三)

昭和五十五年十月三十日 発行

話著者 高橋良雄

編 山形民話の会・武田 正

南陽市赤湯三二八〇—四

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話（三）

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

なお、本書の底本には、山形県立図書館所蔵本を使用しました。
ご協力下さいました山形県立図書館に御礼申し上げます。

平成十九年七月二十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

（電話）〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年三月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）